

## 露風がつかないだ2つの「市」

～北斗とたつの～

みなさんが、当たり前のように耳にすることになった童謡「赤とんぼ」。なぜ、この曲がお昼と夕方に防災無線から流れているかご存知でしょうか。日本で最も愛唱されている「赤とんぼ」は、三木露風がトラピスト修道院で作詩した曲であるからです。

そして、来たる11月4日(土)、兵庫県たつの市の霞城館にて露風に関わる特別展及びシンポジウムが開催され、たつの市より招待を受けた池田市長は、露風が生まれ育った故郷の風土を肌で感じてきました。

たつの市は、三木露風の生誕地であり、子どもたちの健全育成と児童文化の風土作りを目指し、「童謡の里宣言」を行っている情緒溢れる城下町です。露風を通して、遠く離れたこの2市が結ばれたご縁を大切にし、今後も友好な関係が継続されることを祈っております。

また、ご家庭に眠っている露風や赤とんぼにまつわる資料のご提供をお待ちしております。



シンポジウムで挨拶をする池田市長

## 「北斗遺跡ものがたり」番外編「ミコロム 三木露風とトラピスト」

わたしたちの暮らしに今やなじみ深いメロディーとなった名曲「赤とんぼ」。

この郷愁あふれる歌詞が生まれる切欠となった、三木露風とトラピスト修道院の縁はいかにして結ばれ、そしてそれは彼にどんな影響を与えたのでしょうか。今回は、それについての「ミコロム」です。

三木露風(本名・三木操)は明治22年(1899年)に兵庫県揖西郡龍野町(現・たつの市)に生まれました。

創作をはじめたのは小学3年生のころ、恩師の影響により俳句を詠み始めたのがきっかけでした。当時詠んだものには、後に童謡「赤とんぼ」の詞の一節となる「赤蜻蛉とまつてゐるよ竿の先き」という一句もあります。

露風は16歳にして初の作品集である『夏姫』を自費出版し、上京の後は当代を代表する象徴詩(心情などの主題をそのまま直接的な言葉にするのではなく、音楽的・暗示的な手法で象徴的に表現する詩)の作家として北原白秋と並び評されるなど、若くして名声を得た人です。しかし、その作家人生は常に順風満帆だったわけではありませんでした。

明治43年(1910年)から3年間、

露風は一時文壇での居場所を失い、「(苦い)懐疑」「(良心)『美学草案』」つまりは人間不信を抱えながら放浪の日々を過ごす事態に陥ってしまいました。

これに光を射したのが、東海道を放浪した際の静岡・沼津天主公会堂でのピリング神父との出会いでした。この時触れたキリスト教の教え、そして日々の修道生活は彼の傷ついた心を癒すと共に、彼の詩作そして人生そのものに大きな影響を与えることとなります。

やがて文壇に再び咲いた露風ですが、さらなる詩作の境地を求めふたたび沼津公会堂を訪ねます。そこで勧められたのが、トラピスト修道院の訪問でした。

露風が初めてトラピストを訪れたのは大正4年(1915年)のことでした。そこに広がる当別の大自然の中、信仰のもと日々を過ごす修道士たち、そしてその先頭に立つプリーエ院長の姿に深く感銘を受けた露風は、同年その感動を詩集『良心』として上梓。その後も毎年のように同院を訪れ、ついに大正9年(1920年)、プリーエ院長の懇願を請け、修道士たちの文学講師として赴任します。

著書『詩歌の道』の中で露風は、「修道院の廊下では一切の生活が象徴的意義を有すると私は感じた」と述べています。日々の暮らしの所作ひとつひとつが、特にそう明言しなくともその身に秘めた信

仰のあらわれである…これが「かたちにして明示せず目指すものを表現する」という象徴詩の姿と重なったのでしょうか。

また、当別の大自然の中の暮らしは、処女作『夏姫』に見られるような、彼の詩作の原点である自然への憧憬をも再び呼び起こしたのではないのでしょうか。

ふるさとを出、長く険しい道程と深い詩作への探求を経て、自らの心を救った信仰に導かれ辿り着いた地に広がる、大自然という自らの原点との「再会」。そう考えると、ここ北斗でつむがれた「赤とんぼ」の詩が、彼の故郷・たつので詠まれた「赤蜻蛉とまつてゐるよ竿の先き」の句でしめられた意味、そこにこめられた思いが伝わってくるような気がします。

露風はその後大正11(1922)年に洗礼を受け、修道士たちに教授を行うとともに自らも修道生活に励み、新たな詩作の境地を開きます。この生活は彼にとって「今最も人間らしい人々の中で暮らしてゐる」(『美学草案』)と表現するほど満ち足りたものでしたが、病のため大正14年(1925年)に志半ばにして修道院を去ることとなります。

帰京後も露風はトラピストに思いを寄せ、『信仰の曙』等の詩集や修道生活を基にした『美学草案』『詩歌の道』などの詩歌論・随筆等、数多くの作品をのこしています。(郷土資料館 時田 太郎)